

往生伝の人間観—現代の人間観・死生観と対比して

安達俊英

法然の臨終に至る二、三週間に関しては、『御臨終日記』や各種法然伝などにかなり詳しい記述が残されている。それを読むと、法然の病状は相当に悪化していたようであるが、その状況の中、法然の弟子たちは近々、法然が亡くなることを前提として法然に質問したり、臨終の準備をしたりしていることが知られる。例えば、臨終行儀に必要な阿弥陀仏像や五色の糸を用意して本人に勧め、法然に自身の往生の可否を尋ねたりする(『御臨終日記』)ばかりではなく、亡くなる二週間前には法然の住居のすぐそばに墓穴を掘っていたりする(『諸人霊夢記』)。そこには、死が近いことを本人に隠そうとする意図は見られないと言ってよかろう。

しかも、このようなことは法然に限ったことではない。江戸期に成立した各種往生伝にも同様の記事は散見されるところである。例えば、『三河往生験記』所収の藤屋治右衛門の子息の一話などはその好例で、家族も病人の臨終に向けて積極的に手助けしている。

(なお、同じ往生伝でも平安期の往生伝には同種の記事はほぼ見ることができないが、これは平安期の往生伝が、往生人の超越性等を喧伝することの方に大きな関心を寄せたためであろうか。)

いずれにせよ、往生伝等には、臨終が近いことが確実な者に対し、死が近づいていることを隠すことなく、またむやみに励ますこともなく、むしろ余命わずかなことを前提として、死の準備をしていることが知られるのである。もちろん、これらの事例は往生伝に採録されるぐらいであるから、かなり特殊なケースという可能性も考えられるが、そこには本人のみならず、周囲の者も同様の価値観を有していることが知られ、そのことからすると往生伝に載るような者にのみ当てはまる特殊事例というわけでもないことが推測されるのである。

一方、現代においては、(ホスピス等でもない限り)たとえ余命が少ないことを家族等が確実視していても、それを本人の前で明言することはあまりなく、よって死を前提とした話を切り出すことも、ほとんど見られないようである。

しかしながら、既に末期ガンの告知なども積極的に行われるようになってかなりの年月が経ち、医療施策的にも在宅で臨終を迎える方向に舵を切った現状からすると、いずれは周囲の者も当人の死を前提として会話・準備が行われるように変化してゆくかもしれない。まさに死を遠ざけてきた死生観から本人と家族等が共に死と向き合い、死を共有する死生観への変遷とすることができようか。

キーワード：法然伝、臨終行儀、家族による死への準備